

世界全体のためにここにいる — ユージン・スミスと水俣 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

熊本県の水俣市は漁場として名高い豊かな海に恵まれていた。だが工場排水に含まれるメチル水銀によって水質が汚染される。水俣湾の魚介類を食べていた漁民や地域住民は口や手足がしびれ死に至る患者もいた。公害をもたらした大手化学企業は責任を認めず抗議の声が広がっていく。

アメリカの写真家ユージン・スミス（1918—1978）はアイリーン・美緒子・スミスと共に水俣に移り住む。メチル水銀に冒されて眼が見えない、話せない、歩けない子供たちがいた。約3年間、現地で生活し、取材し、撮影する。

写真は小さな声に過ぎない。それでもときおり大切なことを伝える。1枚の写真がいつか誰かの意識を呼びさますと信じていた。

写真をよくするためなら

ユージンはカンザス州ウィチタで生まれた。母はネイティブ・アメリカンのポタワトミ族の祖先を持つ。父は小麦商を営んでいた。

13歳のとき母にもらったカメラで写真を撮り始める。撮影したスポーツ・イベントが地元紙に掲載され、写真の魅力に憑りつかれていく。

大恐慌の時代に家業は破綻し、父が自殺した。ウィチタ・ノース高校卒業後、ノートルダム大学を中退し、ニューヨークで写真家をめざす。

第2次世界大戦が激化する1943年、従軍記者となってサイパン、沖縄、硫黄島へ派遣された。戦闘中に傷ついた幼児や日本兵の塹壕を攻撃する

海兵隊の写真などを撮り、ライフ誌などに提供する。

26歳になった1945年、沖縄戦で歩兵に同行中、日本軍の迫撃弾が炸裂し、爆風で全身を負傷した。左腕に重傷を負い、顔面の口蓋が砕け、固形物の摂取が困難

になった。約2年間にわたって療養生活を送り、生涯その後遺症に悩まされる。

戦後、ライフでフォト・エッセイの連載を開始し、反響を呼ぶ。1940年代後半から1950年代にかけて『楽園へのあゆみ』『フォーク・シンガー』『カントリー・ドクター』『スペインの村』『助産婦』『仕事中のチャップリン』『慈悲の人シュヴァイツァー』『ピッツバーグ』『ハイチ』などの作品集を発表し、国際的に知られるようになった。

白と黒の鮮烈な対比を特徴とするユージンの作品は妥協のない暗室作業によって生み出された。「写真をよくするためならトリミングを行う。世界は35mmカメラのフォーマットに都合よくあうようにできている訳ではない」と。

プライベートではマンハッタン6番街のロフトでジャズ・ミュージシャンたちと暮らし始めた。連日連夜、セロニアス・モンク、ズート・シムズ、ローランド・カークらによるジャムセッションが



ユージンとアイリーン

繰り広げられた。1965年までにオープンリールでユージンが録音した約4000時間に及ぶテープと4万枚近い写真をもとにドキュメンタリー映画『ジャズ・ロフト』が2015年に制作される。

患者の悔しさを自分のものに

51歳になった1970年、スタンフォード大学に通っていた20歳のアイリーンと出会う。彼女は母が日本人、父がアメリカ人の東京育ちで11歳のとき渡米し、当時は夏休みのアルバイトで日本語の通訳をしていた。ユージンからアシスタントを頼まれ、大学を中退して共に活動していく。

翌年、ふたりは写真展を開催するために来日し、まもなく結婚して原宿のセントラルアパートで暮らし始めた。新宿の小田急百貨店で写真展を開き、初めて水俣を訪れる。水俣病に象徴されるように日本全国で公害が社会問題となっていた。

ふたりは水俣病の多発地帯である月ノ浦に家を借りた。水俣病の最初の公式認定患者の両親が大家だった。写真学校の学生でユージンの写真展を見て感動した石川武志が無給のアシスタントとして同行し、3人で活動を開始する。

水俣病被害者の補償問題は化学会社チッソと政府の冷淡な態度で難航していた。憤った患者とその家族たちは東京・丸ノ内にあるチッソ本社前で座り込みの抗議活動を行う。1972年1月7日、千葉県市原市五井にあるチッソ五井工場への抗議活動にユージン、アイリーン、報道陣も同行した。ここで患者を含む交渉団と新聞記者など約20人が負傷する五井事件が発生する。実力排除に出たチッソは約200人の従業員を動員して殴る蹴るの暴行を加えた。ユージンもカメラを壊され、このときの後遺症で頭痛と視力低下に苦しめられた。のちにユージンは「患者さんたちの怒りや苦しみ、そして悔しさを自分のものとして感じられるようになった」と語っている。

奮起したユージンはアイリーンとライフ1972年6月2日号に「排水管からたれながされる死」と題するフォト・エッセイを寄稿した。胎児性水俣病の少女・上村智子を母親が抱いて入浴させている写真「入浴する智子と母」が初めて公開され、彼の代表作となる。翌年、新たに西武百貨店池袋

店で写真展『水俣一生、その神聖と冒瀆』を開催。この頃、ユージンの体調はさらに悪化し、経済的にも行き詰ってアルコール依存症となる。

ジャーナリストの責任と信念

アイリーンとの共著で1975年、英語版写真集『MINAMATA』が出版された。序文でユージンは「ジャーナリズムにおける私の責任はふたつあるというのが私の信念だ。第一の責任は私の写す人々たちに対するもの。第二の責任は読者に対するもの。このふたつの責任を果たせば自動的に雑誌への責任を果たすことになる」と書き記した。

水俣における共同プロジェクトはこれで最後になった。ユージンとアイリーンはそれぞれ帰国し、やがて離婚する。アリゾナ大学の客員教授となったユージンは後遺症による神経障害と視力の低下でカメラのシャッターを切ることもできなくなっていた。自宅近くの食料品店で発作を起こして転倒し、59歳で帰らぬ人となる。

生前ユージンは外国人なのになぜ水俣にいるのかとたびたび尋ねられた。彼は「この水俣で起きていることに私は外国人として関わっていない。それは私自身のため、妻のため、子供たちのため、水俣の住民のため、世界全体のためにここにいる」と答えている。「写真は小さな声だ。写真はときに物を言う。それが私、そしてアイリーンが水俣で写真を撮る理由である」と語ったユージンは国境を超えて人間の尊厳を守ろうとした。

2020年『MINAMATA—ミナマター』がベルリン国際映画祭で公開された。プロデューサーを買って出たジョニー・デップがユージン、美波がアイリーンを演じ、真田広之、ビル・ナイらが共演、坂本龍一が音楽を担当する。ユージンに共感するジョニーは「今日まで続いている出来事に対して人々の関心を引くことが重要だ」と発言した。

作品を観たアイリーンは事実と異なっている点を指摘したうえで「患者さんの苦しみと闘いの素晴らしさが世の中に知られていくこと、そしてユージンのジャーナリストの信念が話題になっていくことは非常に嬉しく思います」と述べた。ジョニーの迫真の演技に「ユージンがいる」とまるで生きているように感じた。